

経済同友会「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」主催

「教育フォーラム」

中学生・先生・保護者を招き開催

学 校と企業・経営者の交流活動推進委員会（以下、推進委）は、3月8日、中学校の生徒、先生、保護者を招いて、「教育フォーラム」を日本工業倶楽部で開催した。昨年度に続き2回目となる教育フォーラムは、生徒と先生がそれぞれのテーマについて、経営者を交えて考えていくオープンな場となった。生徒のテーマは「勉強するのは何のため？ 働くってどういうこと？」、先生のテーマは「これからの社会で求められる力と教育のあり方」。

当日は、推進委が行う出張授業などで交流実績のある学校を中心に、都内・都下・埼玉・千葉の公立校22校、都内の私立校2校から、教員45名、生徒47名が集まった。ほかに、推進委のアドバイザー、学校等教育関係者、推進委委員も多数出席。参加校数は昨年を上回り、活動の広がりを示す形となった。

プログラムは講演とグループディスカッションという内容。「グローバル時代の実社会ではどういった力が必要なのか」という、総論部分を基調講演で提示し、グループディスカッションでは個人の問題意識に基づいた各論部分について、経営者とともに語り合っていこうという趣向だ。基調講演の講師は小林いずみ氏（副代表幹事・教育問題



(写真上) 教育フォーラム第1部基調講演の様子。
(写真右) 交流会であいさつする遠藤勝裕委員長。
遠藤氏は第2部で、教員グループの講師も務めた。「教育は家庭、学校、企業、地域社会の共同責任」とし、その中で教育現場と企業の役割を考えた。



●プログラム

【第1部：基調講演】「グローバル時代に求められる生きる力」
小林いずみ氏（副代表幹事／メリルリンチ日本証券 取締役社長）

【第2部：グループディスカッション】

- ◆生徒グループ
「勉強するのは何のため？ 働くってどういうこと？」
- ◆教師グループ
「これからの社会で求められる力と教育のあり方」

<講師>

- 遠藤勝裕氏（日本証券代行 取締役相談役）
- 大塚良彦氏（大塚産業クリエイツ 取締役社長）
- 木村廣道氏（ライフサイエンスマネジメント 取締役社長）
- 小林いずみ氏（メリルリンチ日本証券 取締役社長）
- 小林恵智氏（インタービジョン 取締役会長）
- 斎藤博明氏（TAC 取締役社長）
- 建部信也氏（スリー・アール 取締役会長）
- 中村紀子氏（ポピンズコーポレーション 代表取締役）
- 廣瀬駒雄氏（ジョイント・コーポレーション 取締役）
- 山中信義氏（日本コンラックス 取締役会長）

交流会

委員会委員長）が務め、グループディスカッションの講師は10名の推進委メンバーが務めた。

第2部終了後には交流会が開かれ、参加者も講師もくつろぎながら語り合った。あいさつに立った推進委委員長の遠藤勝裕氏は、「先生方との今日の議論を

通じ、問題の本質は教育行政や家庭にあるのかもしれないと感じた。今後も教育現場をサポートし、経営者の立場から問題解決のお手伝いをしていきたい」と述べ、学校と企業・経営者の交流活動に引き続き積極的に取り組む意欲を示した。

グローバル時代に 求められる生きる力

今は、世界中から人や材料や資金を集めて製品を作り、その製品が世界に向けて流れていく時代です。物やお金や情報には国境がほとんどありません。それが「グローバル時代」です。

私が働いている「メリルリンチ」という証券会社は、アメリカに本社があって、世界37カ国で仕事をしているグローバル・カンパニーです。日本では約1500名が働いていて、そのうち250名は外国人で32カ国から来ています。そうした会社で働いてわかったことは、いろいろな価値観があり、いろいろな考え方をしている人がいるということです。

以前、こんなことがありました。日本のお客さまから「本社からの入金1円足りない」という苦情がきたのです。日本人の感覚では、たとえ1円でも金融機関からの入金額が約束と違うのは大問題。あわててアメリカの本社に「至急、1円を振り込んでほしい」と伝えると、「手数料を20ドルかけて1円を送金するのは不合理だ」と言われま



した。この場合、どちらの考え方もそれぞれに正しいのですが、ものの価値の測り方が違っているのです。実際の世の中は、問題に対する答えがひとつではありません。では、どうするか？話し合っ、互いに納得できる答えを見つけ出すしかないのです。これが、グローバル社会で生きるということです。ちなみに、1円は、次回の振り込みの時に精算することになりました。

いろいろな国の人と話し合うには、コミュニケーションの力が必要です。英語が話せることも重要ですが、それ以上に大事なものは、相手のものの考え方を理解することです。また、自分をわかってもらえるように相手に伝えることも、同じくらい大事です。これがグローバル社会で必要とされる力のひとつです。その時に、伝えようとする自分の意見がなければ、相手には何も伝わりません。例えば会議などでは、発言しなければ参加していないのと同じと思われてしまいます。日本以外の国の人には、「この人が発言しないのは、意見がないからだろう」と考えるのです。自分の意見を持ち、そしてしっかりと表現する力を身に付けることが必要でしょう。

自分が意見を言う時に、他人と意見が違うのは当たり前のこ



とです。同じように、人に得意・不得意があるのも当たり前のことです。それを認め、そして、他人とは違う自分に誇りをもってほしいと思います。

自分ができないことは他人に助けてもらい、自分が得意なことで他人を助けていく——こうしてチームワークが生まれます。「アメリカ人は個人主義で、チームワークが苦手」というのは間違いです。アメリカ人は、自分にできることとできないことがあるのを素直に認めています。他人に頼む勇気と責任をもつことも大事です。

グローバルな社会には、これまで知らなかったことがたくさんあります。新しいことを恐れず、とにかく挑戦してみてください。その中で自分の新しい能力を発見するかもしれません。失敗しても、どうすればうまくいくのかを考えるきっかけになります。自分の意志で挑戦して成功した時の喜びは大きく、次の挑戦への意欲が湧いてくるのです。

第2部 グループディスカッション

生徒
グループ

勉強するのは何のため？
働くってどういうこと？

教員
グループ

これからの社会で求められる力と
教育のあり方

Keizaidoyu Express



参加者への事前アンケートで
充実したグループ討論

グループディスカッションは生徒と先生がそれぞれ8～9名に分かれ、講師役の経営者と討論を行った。

テーマは、生徒グループが「勉強するのは何のため？働くってどういうこと？」、教員グループが「これからの社会で求められる力と教育のあり方」。約2時間にわたり、各グループとも真剣な意見交換が行われた。

フォーラムの開催に当たって、参加希望者に対して事前アンケートが実施されており、生徒であれば「将来、何になりたいのか」、先生であれば「教育現場で感じる悩みや問題」などについ

て、情報や意見の収集は済ませていた。講師は全員、アンケート回答に目を通した上で、討論用に論点を整理した配付資料を作成し、グループディスカッションに臨んだ。中には、アンケートに書かれていた先生からの質問に対し、経営者としての回答を詳細に用意していた講師もいた。こうした参加者・主催者両者の準備によって、初対面同士であるにもかかわらず、密度の濃い話し合いが可能となった。特に生徒グループの方は、討論開始直後は緊張して発言も少なかったが、アンケートの回答を元に講師が一人ひとりに語りかけていく中で、次第に発言が活発になるようになっていった。

生徒グループの感想

「たくさんの人の意見を聞くことができたこと、自分の意見も聞いてもらえたことがよかった」
「初めて学校外の話し合いでしたが、とても楽しく、参加してよかったと思いました」
「私たちには可能性がたくさんあるということ。自分に少し自信が持てるようになりました」
「普段あまり考えたことのない話を深く考えさせられました。こういう機会がほかにもあったらいいと思います」
「少し緊張した。明日からの私はたぶん違っていると思う。これを生かしていきたい」
「普段自分の思っていることを言えないけど、こういう場で正直に思っていることを言えた」
「将来についての相談に対していいアドバイスがもらえた」

先生グループの感想

「立場や職責の違うメンバーがひとつのテーマに沿って意見や考えを出し合うことは素晴らしいと思う」
「教員だけのディスカッションと違い、幅広く意見が出た。こういう会は疲れるが楽しい」
「企業が『自分で考える人材』を求めていると聞きました。私自身が抱いている想いに関連した話をたくさん聞くことができ、たいへん貴重な機会でした」
「自分の学校経営に足りなかった部分が見えてきました」
「学校にはさまざまな課題があるが、参加者各人がなんとか変えていこうとする考えを持っており、心強く感じた」
「教育界では使わないキーワードを知ることができた。教師としての使命感を新たにしたい」